



黒川 清

アジア学術会議の使命

はじめに

第4回アジア学術会議が韓国ソウル、由緒ある Westin Chosun Hotel (朝鮮ホテル)で開催された。アジア学術会議は日本学術会議の10年にわたる努力の成果であり、2001年からバンコク、クアラルンプール、パリそして今回ソウルと、参加10カ国の持ち回りで毎年開催されている。日本学術会議にはアジア学術会議委員会があり、アジアでのこの大事な会議の使命を支援していく責任を果たすべく、活動している。今回も、日本学術会議からは委員会委員をはじめとして20名の参加を得たことは、心強い限りに感じられた。

今回は、主催の大韓民国学術院会長であり、またアジア学術会議会長のHo Wang Lee(リー)先生を中心とした運営によって、アジア学術会議はさらに一歩前進できたと感じられた。さらに、従来から会議とともに開催されてきた公開シンポジウムでは、アジアの経済、化学の先端を二つのテーマに取り上げ、ノーベル賞受賞の野依良治先生をはじめとしたすばらしい演者と、韓国の多くの若い科学者たちの参加を得て、韓国でアジア学術

会議の活動をよりよく知ってもらえたと考えている。会議の詳細については参加各委員からの報告を見ていただくことしたい。

理事会(Management Board)

理事会(Management Board)では、この会議の使命を中心に討論され、従来の方針を維持しつつ、発表できる成果の作成へさらに協力体制を進めたいという認識を確認した。すなわち、世界人口の60%を含み、これから確実に成長するアジアで予測される多くの問題に対するアジアの「科学者コミュニティ」の責任を果たしたいというものである。したがって、当面は第1回からのテーマである「アジアの持続的発展：繁栄し、調和のとれた、より緑あふれるアジア(Sustainable Development : Prosperous, Harmonious, and Greener Asia)」についての政策提言の作成と、各国、地域、また国際的な「科学者コミュニティ」への活動を認識していただき、協力、支援を得ることである。このような活動を通して、会議の使命が意味のなるものになっていくであろう、という共通の認識である。



議事進行にあたる黒川日本学術会議会長(左はLee SCA会長)

理事会ではこのようなテーマの趣旨で見たときの現在の課題と問題点についての討論から必要な案件を総会に提案し、承認してもらうことにある。必要な会則の変更のほか、この会議の特徴である「共同プロジェクト(Joint Project)」のあり方等について議論した。「共同プロジェクト」の報告書の作成方策、配布方法、website作成の可能性、会費等についても議論された。また、新たにモンゴルからモンゴル科学アカデミーの参加が提案された。

総会(General Assembly)

各国からの委員の参加を得ることができ、またオブザーバーとしてAPEC(アジア太平洋経済協力会議)、ASEAN(東南アジア諸国連合)、CPTM(Commonwealth Partnership for Technology Management)、IAQ(InterAcademy Council)、ICSU(国際科学会議)、IVI(International Vaccine Institute)、KIST(Korean Institute of Science and Technology)、NAEK(The National Academy of Engineering of Korea)、PSA(Pacific Science Association: 太平洋学術協会)、理化学

研究所の参加を得た。

日本からは岸輝雄、戒能通厚の両副会長が委員として出席したが、多くの日本学術会議からの参加者にもオブザーバーとして出席していただいた。公開シンポジウムでも発表されたように「共同プロジェクト」ではマレーシアがアンカーとなった「Sustainability Science」はほぼ完成しており、これからの課題を提示しつつ報告書として完成させる。タイがアンカーとなった「Sustainability Development Indicators」は各国の状況を取り入れて比較できるような方向が示された。次回、来年5月ハノイで開催予定のベトナムからの報告(10月に訪問予定)、Ubuntu報告書の国連での動向等が議論され、理事会からの全提案が議論、承認され、会長(ベトナム)、次期会長(インド)を決めた。

課題と方向

世界人口60億余の60%を含み、これから確実に成長するアジアで予測される多くの問題、すなわちエネルギー、食料、水、経済、環境等をめぐって多くの利害があり、また利害の調整等に対し



アカデミックシンポジウム(野依先生講演)

ては、多様な文化、宗教、言語、経済等とこれらを反映する歴史の認識と将来への展望が欠かせない。これらはひとつひとつの国の問題であるだけではなく、地域的に大きな課題を共有していることは明らかである。科学者の集団としてのアジアの「科学者コミュニティ」はその責任を果たすべきであり、アジア学術会議はそのような認識を共有している。

アジアの多国間の「科学者コミュニティ」からの提言は、地域社会を構成する各国家への科学にもとづく重要な共通の課題、すなわち「持続可能性」に関する政策提言であり、これからの社会への貢献は計り知れない。これらをどのような形で利害関係者へ提案していくのか、国の政策へと反映できるか、これらこそが社会へ責任ある「科学者コミュニティ」の課題である。アジア学術会議はこのような認識の共有を形成しつつあり、ほかの同じようなアジアでの連合体、PSA、さらにはICSUのような国際的な「科学者コミュニティ」との共同活動の形成も課題であろう。

このような認識があるからこそ、今回の総会では、2007年度には日本学術会議、PSAとアジア学術会議を同時に開催することが承認された。アジア各国での日本への期待は大きいのであり、その期待へどのように応えるか、これが日本そして日本学術会議の責任というものではあるまいか。20世紀の歴史を振り返れば、これからの日本の大きな課題はアジアでの信頼の再構築と貢献であり、アジアで信頼されない日本は連合体を形成しつつあるヨーロッパ、そしてアメリカ等の国際社会での信頼を得ることは徐々に難しくなると私は考えている。国境のない科学者の「コミュニティ」の連合体であればこそ、日本学術会議とアジア学術会議のアジア社会での役割は大きな可能性を含んでいるといえよう。これからの活動に期待したい。

おわりに

今回のアジア学術会議は、5月12日に開催された大韓民国学術院設立50周年と時期を同じくして



総会の模様

開催された。Ho Wang Lee アジア学術会議会長が大韓民国学術院会長でもあるのでこのような日程が可能となった。この50周年記念式典には弾劾裁判中の盧武鉉大統領に代わって、高建大統領代行が出席された。また、特別招待は縁の深い日本学士院の長倉三郎院長、中国科学院のLu会長、スウェーデンのThe Royal Swedish Academy of SciencesのLindsten会長とともに日本学術会議会長として私を招いていただいた。

このようなアカデミーの交流を通して多くの「科学者コミュニティ」が共通の認識と、連携を強化していけるというものであろう。まったくの偶然ではあるが、盧武鉉大統領の弾劾裁判についての特別法廷の判決の発表がアジア学術会議の公開シンポジウムの14日の朝に発表され、大統領は大統領官邸である青瓦台に戻ることになった。



開会式

黒川 清（くろかわ きよし 1936年生）
日本学術会議会長、アジア学術会議事務局長、東京大学先端科学技術センター客員教授
専門：診療科学、病態代謝学